

# さきたま資料館の教育普及活動

## —体験的な活動を中心として—

関 口 考 明

### はじめに

今学校と博物館は大きな変革の時代を迎えている。平成14年度から全面実施となった小・中学校の現教育課程は、完全学校週5日制の実施や「総合的な学習の時間」の創設など、教育の在り方を大きく変化させている。また、「生きる力」を身に付けることの重要性を指摘しており、これらは、生涯学習という観点からの変革であり、学校教育には、その基礎を担うことが求められている。

学習指導要領の指導計画の作成と内容の取り扱いに、

#### ・小学校社会科

「博物館や郷土資料館等の活用を図るとともに、身近な地域及び国土の遺跡や文化財などの観察や調査を行うようにすること」(小学校学習指導要領)

#### ・中学校社会科

「日本人の生活や生活に根ざした文化については、各時代の政治や社会の動き及び各地域の地理的条件、身近な地域の歴史とも関連付けて指導するとともに、民俗学などの成果の活用や博物館、郷土資料館などの見学・調査を通じて、生活文化の展開を具体的に学ぶことができるようにすること」(中学校学習指導要領)

と明示されている。さらに、小学校学習指導要領解説 社会編には「地域にあるこれらの施設を積極的に活用することによって、児童の知的好奇心を高め、学習への動機づけや学習の深化を図ることができる。また、諸感覚を通して実物や本物に触れる感動を味わうことができる。学校での積極的な活用を通して、これらの施設を自ら進んで利用できるようになり、そのことは生涯にわたって活用する態度や能力の基礎となるものである。」と述べている。また、博物館法第3条第2項に、「博物館は、(中略)更に学校教育を援助しうるようにも留意しなければならない。」とある。

これからの博物館にとって、学校教育との連携を図り、体験学習を中心とした教育普及活動をいかに充実させていくかが大きな役割であることはいうまでもない。

そこで、さきたま資料館では子どもたちに広く豊かな体験の場、学習の場を提供すべく様々な教育普及活動に取り組んでいる。ここでは、当館の教育普及活動の実践を、体験的な活動を中心として、学校教育との関わりからみていくこととする。

### 1 わくわくサタデーミュージアム

わくわくサタデーミュージアムは、完全学校週5日制の施行にあわせ、県立の博物館や資料館が土曜日に開催する、子どもたちのための体験型活動プログラムである。生涯学習活動のひとつとし

て、博物館や資料館を子どもたちの身近な活動拠点としてもらえるよう、その魅力を体験してもらおうとするものである。すなわち、土曜日の子供たちの受け皿となる事業、体験・実物をとおして楽しく学び、生きる力をはぐくむ事業である。

さきたま資料館では、「遊んで、学んで、楽しんで」をスローガンに、当館の特色を生かした事業を工夫し、児童生徒が博物館の魅力を体験できるように実施している。

平成16年度は、21回実施した。対象は小中学生と保護者である。(総参加者数806名)

主なものは、

「まが玉づくり」「ペーパークラフト鉄剣づくり」「ペーパークラフト稲荷山古墳」

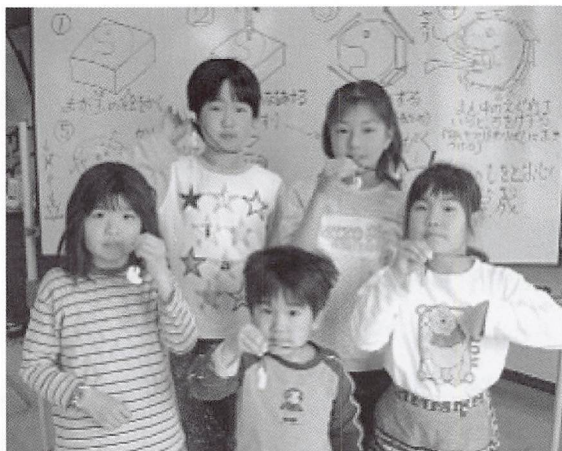
「昔と今の稲を植えよう」「ほくらは古墳探偵団(バスツアー)」「昔と今の米を炊こう」

「まゆ玉づくり」など

内6回は埼玉県環境科学国際センター(騎西町)との共催事業で「昔のくらし体験隊」と題して実施し、また、内2回は県立歴史資料館(嵐山町)との共催事業として実施した。

平成17年度は、15回実施した。\*1月から3月期は館内改装のため休止するので、昨年度より少なくなっている。(総参加者数550名)

内4回は埼玉県環境科学国際センターと、1回は県立歴史資料館との共催事業として実施した。



「まが玉づくり」作品の紹介です。



「ペーパークラフト鉄剣づくり」金色のペンで115の文字を書き入れています。



「昔と今の稲を植えよう」  
古代米の田植えを開始しています。



「昔と今の米を炊こう」古代米を試食しています。



参加した子どもたちの感想は

- ・「普段の生活では体験できないことができた。」
- ・「多くの人とふれあえて楽しかった。」
- ・「学校で今古墳の勉強をやっていたので、とても参考になった。」
- ・「昔の生活を知るとともに、いつまでも古墳を大切にしていってほしいです。」

などの感想を述べていた。子どもたちのうれしそうな表情がなんともいえずよかった。

そのほか、平成17年度、夏休みに風土記の丘教室を4回実施した。

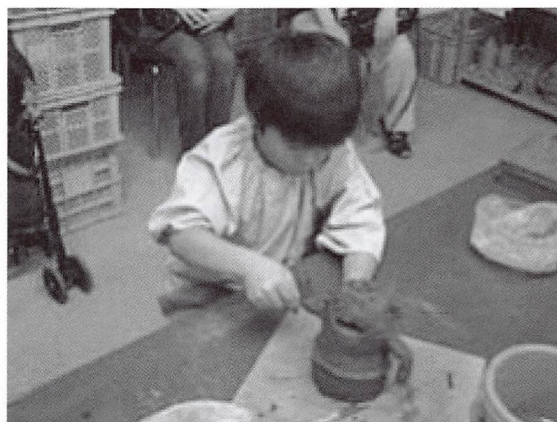
内容 「埴輪づくり」

(行田市はにわの館との共催事業)

「まが玉づくり」

また、「身近な歴史を描こう 写生大会」を県立歴史資料館との共催事業として実施した。

子どもたちにとって、「見学したり調べたり」する体験的な学習に主体的に取り組むこと自体が



「埴輪づくり」踊る埴輪を製作しています。

自らを心豊かに成長させていくプロセスであり、学習内容そのものであると考える。自ら意欲的に学ぶ態度や思考力、判断力、表現力といった生きる力をはぐくむ教育の推進のためには、博物館施設も、こうした「体験の場」づくりに取り組んでいかなければならない。生涯学習社会を迎えた今、博物館施設の果たす役割は極めて重要である。

## 2 博学連携 「総合的な学習の時間」、「出前授業」への対応

### (1) 「総合的な学習の時間」等の支援について

教育普及活動の一環として、小・中学校の総合的な学習の時間、社会科などの調べ学習に対して、博物館職員の専門性を生かした学習支援を行っている。

平成15年度、東部教育事務所行田地方庁舎駐在管内(8市町村)の小・中学校、近隣(鴻巣市、北本市、吹上町)の各小・中学校にPRするために文書を配布した。平成16年度からは、当館ホームページの「見る 学ぶ」のコーナーに『「総合的な学習の時間」等の支援について』という内容で掲載している。

まず、来館については、事前に電話連絡をもらえるよう博学連携資料館利用研修会等を通じてその周知を図った。また、「総合的な学習の時間」等での来館申込書(資料1)を用意し、学校側に、児童生徒を来館させるねらいや児童生徒が何を求めて来館しようとしているのかなどについて、具体的に記入してもらっている。直接文書で依頼してくる学校に関しては、電話等で確認している。しかし、学校側の事情もあり、詳細について十分時間をとった打ち合わせがしにくい現状もある。今後更に検討を加え、改善を図っていくことが課題となっている。

(資料1)

『総合的な学習の時間』等での来館申込書							
平成 年 月 日							
埼玉県立さきたま資料館 様				( ) 学校・校長 ( )			
				申込責任者 ( )			
・来館希望日時	平成 年 月 日	午前・午後	時 分～ 時 分				
・利用学年	年		利用人数	人			
・利用教科等							
・学習テーマ							
・調べ(見学)したい主な内容	*具体的にお願いします。						
・資料館の対応に対する要望等							
・連絡先 (担任者または副担任者) ( )							
・電話 ( - - )・FAX ( - - )							

(資料2)

二んには、郷土の宮や祠を調べたりしました。  
 関心は、おぼろげなくおぼろげなことを感じます。先日の取材の際には、たくさん  
 の資料を拝見していただきました。私も、私たちにわかるよう説明していただき、お世  
 にありかとうございました。私自身印象に残っているのは、鉄剣のことについて、そ  
 自分に考えていたよりも、難しいことがわかりました。実際に資料館  
 の中を見学していたとき、とてもよい機会に役立ちました。関心は、同じく、同じく  
 を今後の学習で活用していきたいと思っています。また、たくさんのお話を聞  
 いたことで、自分の住んでいる所にもこんなに大きな宝庫があり、とてもよいお宝と  
 思いました。鉄剣を資料館で見学時、これか日本でも唯一に持っているという物  
 かと感動しました。ほかにも、まだまだ勉強したいものに、ぜひとも勉強になりまし  
 た。まだまだ勉強したいので、お身体には気を付けて、これからもう一歩進  
 みます。さようなら。  
 十二月二日

学習テーマ例

総合的な学習の時間 「わたしたちの自慢の町」「古墳時代の行田」「行田まち探検」「地域・ふれあい」「昔へタイムスリップ」「古墳について」「埼玉の古墳を調べよう」「地区自慢調べ」「博物館で歴史体験」
社会科 「古代の日本さきたま古墳を調べよう」「埼玉県の古墳時代」「米づくりのむらから古墳のくにへ」

対応については、学校側と打ち合わせて、展示見学を組み合わせ、ワークシートを活用し、児童生徒の質問に答える手法で実施している。また、体験学習を希望する学校に関しては、解説と展示見学を組み合わせ実施している。

上の資料2は、児童生徒から送られてきた手紙である。このような学校と資料館との相互の具体的なやりとりは、館としての支援の在り方を見直すきっかけとなり、また、受け入れ後の児童生徒の学習の広がりや深まりを知る貴重な手がかりとなっている。

(2)「出前授業」の実践

前述したように、当館においても様々な教育普及事業を行っているが、博物館等の体験学習を学校全体で、あるいは学年・学級単位で実施することは物理的に困難な場合が多い。そこで、学校側からの要請で館側から直接学校を訪問し、授業を展開、授業に協力する「出前授業」を実施した。

平成17年度は4校・2団体のまが玉づくりなどの体験的な学習に関わってきた。

ここでは、平成17年4月27日(水)に実施した、白岡町立篠津小学校(第6学年65名)の実践について述べる。



前方後円墳の広がりを示した分布図をもとに、前方後円墳が集中して見られる地域があることを確認し、本授業に臨んだ。



これは、社会科の単元名「米づくりのむらから古墳のくにへ」において、単元のまとめの段階で行われたものである。白岡町立篠津小学校の第6学年は、2学級からなる。この実践は学級の枠を取り払い、2人の教諭が指導に当たるいわゆるチーム・ティーチングとして展開された。当館としてもそのチーム・ティーチングの一翼を担ったといえる。まず、中村則裕教諭と事前打ち合わせをして、本実践のポイントやねらい等の説明を受けた。その後、子どもたちへの対応（説明の程度・資料の提供等）について打ち合わせを行った。



パネル資料を見ながら稲荷山古墳出土鉄剣銘についての話を聞いている。

本取り組みの学習単元、学習計画は以下の通りである。

(1) 題材名 米づくりのむらから古墳のくにへ

(2) 単元の日標

- ①（関心・意欲・態度）… 稲作が伝わってから、豪族が地方を支配するようになった時代までの歴史の流れを、稲作をする人々と古墳に関心を持ち、意欲的に調べようとする。
- ②（思考・判断）…………… 近隣諸国からの文化の影響を受けながら、国土が次第に統一されていったことを考える。
- ③（資料活用の技能）……… 稲作の始まりや古墳について、レプリカや写真資料、博物館や郷土資料館の方の話をもとに調べている。
- ④（知識・理解）…………… 大和朝廷により、我が国の国土が統一されていく過程を理解している。

(3) 指導計画（7時間扱い 本時7/7）

校時	学 習 内 容	学 習 活 動
1	<b>米づくりのむら</b> ◆高床の倉庫 ◆指導者の存在 ◆稲作のための道具	○教科書の絵から、むらびとの行動が読みとれるところを抜き出し学習問題をつくる。 ・当時の人々はどんなものを食べていたのだろう。 ・米づくりは誰がどこから伝えたのだろう。 ・米づくりのむらはどうなっていくのだろう。
2	<b>むらからくにへ(1)</b> ◆豪族によるむらの支配 ◆むらとむらの争い ◆王の出現	○吉野ヶ里遺跡復元図から読みとれることを発表する。 ○読み取ったことから推測できることを発表する。 ○むらとむらの争い等を経て、くにが形づくられていくとを知る。

3	むらからくにへ(2) ◆卑弥呼の統治と大陸との交流	○卑弥呼について、どんな人物か調べる。 ○人物の調べ方を知る。
4	大陸文化が伝わる ◆渡来人のもたらしたもの	○渡来人がもたらしたものを調べ、当時の日本と中国の文化のちがいについて知る。
5	古墳が作られる ◆何のために作られたのか ◆どのように作られたのか ◆出土品	○古墳が作られるまでの様子を調べ発表する。 ○人々がどんな思いで古墳をつくったか推測する。 ○埴輪などの出土品を見る。
6	国ができあがってくる ◆古墳からわかること ◆大和朝廷と大王	○古墳に埋葬されたのはどのような人物か考える。 ○大和朝廷のおかれた大和地方を地図帳で確認する。
7	埼玉県の古墳時代 ◆埼玉古墳群と稲荷山古墳鉄剣銘からわかること	○前方後円墳の全国分布図から読みとれたことを発表する ○埼玉古墳群に関わるパネルを見る。 ○さきたま資料館の職員のお話を聴く。 ○大和朝廷と埼玉古墳群との関わりを知る。

本実践の児童の感想は次のとおりである。

6年1組名前

埼玉古墳群と稲荷山古墳から出土した鉄剣の話をきいてわかったことや考えたこと

紙に書いて消えたり破けたりするので、剣に金をうめこんで文字を書いたのが多く考えてやっている人だなあと思った。私は剣の長さは1mくらいあると思ったけど、73.5cmと聞いた時は以外だった。

さきたま資料館、関口先生のお話を聞いての感想

はにわは他にも種類があるとか古墳のまわりにどうしてはにわを置くかや、まが玉の事などよく知らないことや、疑問に思ったことを知れてよかった。私が一番おどろいた事は言葉があたと言う事です。私は社会の授業をやっているとき言葉のことを疑問に思っていたのでとても良かったです。

6年2組名前

埼玉古墳群と稲荷山古墳から出土した鉄剣の話をきいてわかったことや考えたこと

鉄は昔貴重だったんだなあと思いました。文字が金でうめ込まれている事が面白い!!と思いました。金鉄剣についてなぜ、こんな物(金鉄剣)ができたのか知りたいです。

さきたま資料館、関口先生のお話を聞いての感想

埼玉が「さきたま」ということについてビックリしました。埼玉にも古墳がけっこうあるので埼玉は昔争いなどが多かったんじゃないかと思いました。行く機会があったら行田市のさきたま古墳を見たいです。

6年1組名前

埼玉古墳群と稲荷山古墳から出土した鉄剣の話をきいてわかったことや考えたこと

鉄剣に書いてあった文字は書いてあるのかと思っていたけど金をうめこんでいたんだとそれをキラキラしていました。あと稲荷山に古墳も家までさう近かったりしました。古墳と円墳というのがある、円墳の方が多くつくられているそうです。

さきたま資料館、関口先生のお話を聞いての感想

今日はふつうの社会科授業の時よりいろいろお話を聞いてとても勉強になりました。こども博物館にいて実物を見てみたいと思いきや、今日お話を聞いたこと、家の人や友達にお話しておきたいです。





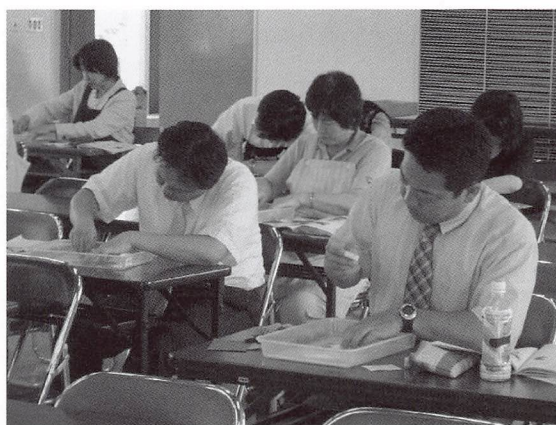
児童は、本実践により、自分の抱いていた疑問が明らかになったことに対する達成感や、パネル資料などの大きい資料を間近に見ながらの解説に充実感をもったようである。体験的な学習が主張されている中、子どもたちにとっては貴重な体験になったと確信できる。鉄剣の話や埴輪の話、古墳の形から考えられる古代の人々の考え方に関する話などから、子どもたちはより一層興味をもったようである。真剣な眼差しで話を聞く児童の表情が印象深かった。児童の反応も好評で、今度は実際に資料館を訪れ、遺構や遺物を見学してみたい、という感想をもつ児童が多かった。また、身近にある文化遺産に対しても、愛着をもち、大切にしていこうとする意欲がはぐくまれたのではないだろうか。

## おわりに

生涯学習社会を迎えた今日、激しい変化が予想される21世紀を心豊かでたくましく生きることのできる人間の育成を目指し、教育改革が進められている。生涯学習の基礎づくりの場としての学校教育には、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を目指した教育活動の展開が強く求められている。とりわけ実物資料を見たり、触れたり、操作したりする体験学習が重視されている。博物館としては、子どもたちのニーズにあうような魅力ある事業を展開するとともに、学校教育との連携を一層深め、「生きる力」を培う場の一つとなっていかなければならない。

今後、総合的な学習の時間等での学校利用の大幅な増加が予想される。受け入れにあたっては、事前に博物館と学校側とが十分に打合せを行うことが必要である。しかし、現状では、一部の学校に館まかせの受け入れ依頼も見受けられる。受け入れにあたっては学校と博物館との対等なパートナーシップ関係が存在しなければならないと考える。「よりよい連携」とは、互いが協力し合う中で、それぞれが自分のよさを発揮することである。子ども（県民）への教育の充実という同じ目標に向かって、博物館と学校が協力し、一段高い取り組みが展開できるよう受け入れ態勢の整備を図っていききたい。

また、出前授業に関しては、遠方では困難な場合があり、ここに県立の博物館施設としての難しさがある。県立の博物館施設としての役割は、こうした実践を学校はもとより県内の博物館等に紹介することによって、それぞれの地域における「博学連携」の促進を図ることではないだろうか。当館では、毎年8月に教員と社会教育担当者を対象に博学連携資料館利用研修会を実施している。こうした場を有効に活用していきたいと考えている。



先生方もまが玉づくりに挑戦

## 参考・引用文献

- 文部省（編） 1998 『小学校学習指導要領』
- 文部省（編） 1998 『中学校学習指導要領』
- 文部省（編） 1999 『小学校学習指導要領解説 社会編』
- 矢作修一 2003 「博物館と学校がつくる総合的な学習－当館の現状と課題－」『埼玉県立博物館  
紀要－28』埼玉県立博物館
- 渡辺 勤 1996 「博物館と学校教育の連携－体験的学習の場としての博物館事業を中心として  
－」『調査研究報告 第9号』埼玉県立さきたま資料館
- 渡辺 勤 1997 「博物館と学校教育の連携(2)－「博学融合」の試み－」『調査研究報告 第10号』  
埼玉県立さきたま資料館
- 田村宜也 1999 「博物館と学校教育の融合を目指して－「出前授業」「博学合同研修会」の取り  
組みを通して－」『調査研究報告 第12号』埼玉県立さきたま資料館
- 川越市立博物館 2005 『やまぶき〈学校教育のための博物館活用の手引き〉』第10集